長崎大学教育学部紀要－教育科学－　第66号　57～72（2004年３月）

全国盲学校における職業教育と進路指導のあり方に関する調査研究
－教育課程の編成と就業支援の実態を中心に－

平田勝政*　　久松寅幸**

A Resarch on the Present Conditions of Vocational Education and Career Guidance of the School for the Blind in Japan

Katsumasa HIRATA　　Torayuki HISAMATSU

Ⅰ．課題意識と本研究の目的

視覚障害者の雇用は，1981(昭和56)年の国際障害者年を契機としたノーマライゼーション理念の普及，障害補償機器（パソコン用各種音声化ソフト・拡大読書器等）の開発等によって徐々に拡大してはいるものの，依然として厳しい現状にある。また，盲学校における職業教育の中心である理療科教育（按摩マッサージ指圧師・鍼師・灸師養成のための職業教育）との関連においても，就業状況に大きな変化が生じている。その背景には，資格試験の都道府県所管から国家試験への移行や鍼灸マッサージ業における晴眼者の激増等がある。さらに，在学者の障害の重度・重複化，多様化の傾向は，盲学校における進路問題への取り組みをいっそう困難なものとしている。したがって，理療関係職域の確保，理療以外の職種を希望する生徒のための職域・職場の開拓，理療の資格取得が困難な生徒および盲重複障害児への進路対策は，現在全国の盲学校が共通にかかえる緊急かつ最重要課題となっている。

以上の現状認識に立ち，本研究は，全国の盲学校における職業教育と進路指導の実態について調査し，その現状を分析して，進路保障問題に関する課題解決のための糸口を明らかにしようとするものである。

Ⅱ．方　法

1．調査対象

全国の盲学校70校（国立１，公立67，私立２）を調査対象とした。

＊人間発達講座　　＊＊長崎県立盲学校

2．調査期間

2002(平成14)年６月11日～７月１日（第１次調査）および
2002(平成14)年11月25日～12月18日（第２次調査)。

3．調査内容

第１次調査では，各盲学校の「学校要覧（平成14年度版)」を収集して，全国盲学校における学部・学科の設置状況と教育課程編成の概要を把握し，第２次調査においては，第１次調査結果の内容を受けて，高等部普通科（単一視覚障害学級・重複障害学級）および小学部・中学部における職業教育・進路指導の状況，視覚障害者の就業支援の状況等を調査内容とした。

第２次調査の主な内容は，以下の通りである。

（１）高等部本科普通科（重複学級を除く）における職業教育と進路指導について
　①教育課程中の職業関係教科・科目取り入れの有無および取り入れている盲学校における教科・科目の名称・履修対象学年・年間総授業時数・指導内容
　②「総合的な学習の時間」中の進路指導に関する内容取り入れの有無および取り入れている盲学校におけるその名称・履修対象学年・年間総授業時数・学習内容
（２）高等部本科普通科重複学級における職業教育と進路指導について
　①教育課程中の職業関係教科取り入れの有無および取り入れている盲学校における教科の名称・履修対象学年・年間総授業時数・指導内容
　②生徒の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容
（３）小学部・中学部における職業教育と進路指導について
　①小学部における職業教育・進路指導の状況および児童の将来の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容
　②中学部における職業教育・進路指導の状況および生徒の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容
（４）視覚障害者の就業支援等について
　①「個別の就業支援計画」実施の有無および実施している盲学校におけるその内容
　②視覚障害者に関する地域の「就業支援ネットワーク」組織の有無および組織化されている地域における支援の内容
　③按摩マッサージ指圧師の資格取得に困難が予想される高等部本科普通科生徒の進路指導に関する基本的考え

Ⅲ．結　果

1．回収状況

調査対象校70校のうち，第１次調査は68校（97.1%)，第２次調査は64校（91.4%）から回答を得た。なお，第１次調査の未回収校２校は，小・中学部のみの設置校であった。

2．第１次調査の結果

第１次調査（「学校要覧」による調査）の結果は，以下の通りである。

表１　全国盲学校における設置学部・学科の状況（平成14年度）

設置学部

学　　部	学校（数）	割合（%）
小・中・高等部	57	81.4
小・中学部	9	12.9
高等部	4	5.7
計	70	100

設置学科

学　　部	学校（数）	割合（%）
本科		
普通	56	80.0
保健理療	51	72.9
音楽	3	4.3
家政	1	1.4
生活技能	1	1.4
専攻科		
理療	58	82.9
保健理療	34	48.6
理学療法	3	4.3
音楽	3	4.3
研修	2	2.8
情報処理	1	1.4
普通	1	1.4
鍼灸手技療法研修	1	1.4
研究部理療	1	1.4

（注）全国盲学校「学校要覧（平成14年度版）」の集計による。

表４－１　高等部本科普通科（重複学級を除く）において教育課程中職業関係教科・科目を取り入れている盲学校（10校）における教科・科目の名称

	学校(数)	割合（%）
職業	4	40.0
産業社会と人間	2	20.0
家庭（食物・保育）	1	10.0
農業	1	10.0
工業（情報技術基礎）	1	10.0
作業	1	10.0
進路	1	10.0
無回答	1	10.0

※複数回答１校）

表４－３　教育課程中職業関係教科・科目を取り入れている盲学校（10校）における履修の年間総授業時数（総単位数）

総授業時数（総単位数）	学校(数)	割合（%）
35（1）	1	10.0
70（2）	5	50.0
140（4）	1	10.0
その他	2	20.0
無回答	1	10.0
計	10	100

（注）「その他」（２校）は、複数の学年・類型に対して異なる時数の盲学校（150時間・175時間）１校，時間数に幅をもたせている盲学校（35～70時間）１校。

表２　全国盲学校高等部本科普通科における学級編成の状況（平成14年度）

重複学級設置の有無

有　無	学校（数）	割合（%）
あ　り	47	83.9
な　し	6	10.7
未掲載	3	5.4
計	56	100

重複学級のクラス別編成の有無

有　無	学校（数）	割合（%）
あ　り	26	46.4
な　し	21	37.5
未掲載	9	16.1
計	56	100

単一障害学級のクラス別編成の有無

有　無	学校（数）	割合（%）
あ　り	28	50
な　し	25	44.6
未掲載	3	5.4
計	56	100

（注）全国盲学校「学校要覧（平成14年度版）」の集計による。

表３　高等部本科普通科（重複学級を除く）における教育課程中の職業関係教科・科目取り入れの有無

取り入れの有無	学校(数)	割合（%）
取り入れている	10	19.6
取り入れていない	41	80.4
計	51	100

表４－２　教育課程中職業関係教科・科目を取り入れている盲学校（10校）における履修対象学年・類型

●全学年のＢ・Ｃ類型
●全学年のＢ・Ｃコース
●全学年（就職を希望している学年）
●普通コース２・３学年，生産コース全学年
●Ａ類型（下学年の教科書使用）・普通学級の全学年（３学年のみ選択）
●２・３学年
●２・３学年
●３学年
●Ａ２コース２・３学年

※無回答１校）

表４－４　教育課程中職業関係教科・科目を取り入れている盲学校（10校）における教科・科目の主な指導内容

●社会人としての生き方・あり方を考える（時事問題を話し合う，自分の適性を知る），進路実現を目指す指導（面接の受け方，求人票の見方），一部は校外学習・職場体験・理療科見学等にあてている
●自身の進路先の決定，進路情報の提供，法制度
●農業実習と理論，調理実習と理論
●陶芸，菓子作り
●調理，クリーニング，内職適仕事（伴う搬入・納品・経理等）
●紙器加工（箱折），布加工（ミシン縫製・ボタン付け），染色，講義（社会についての理解を深める）
●現場実習・自立活動を通して職業教育を行っている
●作業的内容を通して働くことの意味や態度を考える
●指導要領に則った内容

※無回答１（校）。

（1）設置学部・学科等

「学校要覧（平成14年度版）」により，全国盲学校における設置学部・学科の状況を見ると，表1に示す通りである。全体の8割を超える57校が小・中・高の3学部全てを設置しており，また，高等部（設置校数61）の設置学科については，本科普通科・本科保健理療科・専攻科理療科・専攻科保健理療科の4学科，または，本科普通科・専攻科理療科に加えて，本科保健理療科あるいは専攻科保健理療科の3学科を設置する盲学校がほとんど　である。他の職業学科については，理学療法等の学科の設置もみられるものの，それらは極めて少数である。

次に，「学校要覧」掲載の教育課程表により，全国盲学校高等部本科普通科設置校（56校）における学級編成（平成14年度）の状況を見ると，表2に示す通りである。全体の8割を超える47校が重複障害学級を編成しており，そのうち26校はさらにクラス別の編成を行っている。また，単一視覚障害学級においても，半数の28校がクラス別の編成を行っている。

3．第2次調査の結果

第2次調査（「アンケート」による調査）の結果は，以下の通りである。

1）高等部本科普通科（重複学級を除く）における職業教育と進路指導の状況

（1）職業関係教科・科目の教育課程上の位置づけ

全国における高等部本科普通科設置校（56校）中，回答校51校において，平成14年度教育課程の中に職業関係教科・科目を取り入れている盲学校は10校（19.6%）であり，約8割の盲学校（41校）は取り入れていない（表3）。

職業関係教科・科目を「取り入れている」盲学校（10校）について，その状況を見てると，まず，職業関係教科・科目の「名称」は，「職業」が最も多く，他に，「産業社会と人間」「家庭（食物・保育）」「農業」「工業（情報技術基礎）」等である（表4－1）。

履修対象の学年・類型については，各盲学校が「全学年」を基本としながらも，「3学年」「2・3学年」，あるいは普通科に「生産コース」を編成しての履修や，いわゆる下学年対応のクラスに限定しての履修等，生徒の実態に応じた学年・類型（コース）を設定しての職業教育を行っていることが推測される（表4－2）。

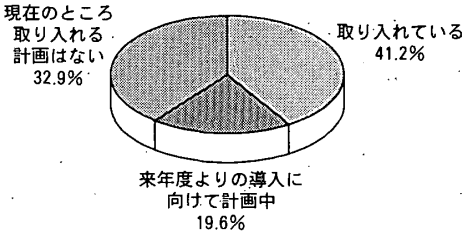
また，年間総授業時数（総単位数）は，最小35時間（1単位）・最大175時間（5単位）であり，70時間（2単位）が5校と最も多い（表4－3）。

さらに，主な指導内容については，「社会人としての生き方・あり方を考える」「進路実現を目指す指導」「進路情報の提供」等の進路意識等に関する内容から，「農業実習と理論」「陶芸」「クリーニング」等の作業的内容まで幅広く行われている（表4－4）。

（2）「総合的な学習の時間」における進路に関する学習

全国における高等部本科普通科設置校（56校）中，回答校51校において，平成14年度「総合的な学習の時間」の中に「進路指導」に関する学習内容を「取り入れている」盲学校は21校（41.2%），「来年度よりの導入に向けて計画中」10校（19.6%）であり，全国で約6割の盲学校が「導入」あるいは「導入」を計画している（表5）。「総合的な学習の時

表5　高等部本科普通科（重複学級を除く）における「総合的な学習の時間」中の進路指導に関する内容取り入れの有無



取り入れの有無	学校(数)	割合（%）
取り入れている	21	41.2
来年度よりの導入に向けて計画中	10	19.6
現在のところ取り入れる計画はない	20	39.2
計	51	100

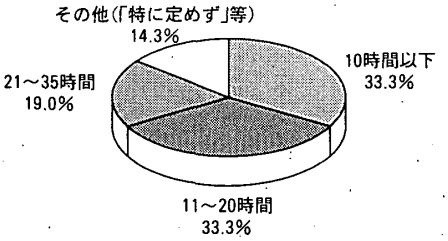
表6－2　「総合的な学習の時間」において進路指導に関する内容を取り入れている盲学校（21校）における履修の対象学年・類型

対象学年・類型	学校(数)	割合（%）
全学年・類型	13	61.9
学年・類型を指定	8	38.1
計	21	100

指定している盲学校の学年・類型

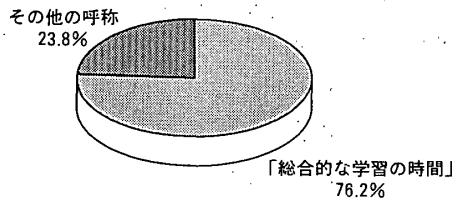
●普通科Ｉ組（１・３学年合同）
●類型Ｉの２・３学年１組
●２学年
●２学年（Ｃ類型）・３学年（１類型Ａ）
●３学年通常学級
●１・２学年
●１～３学年のＡＢ１・Ｂ２・Ｃコース
●１～３学年のＡ類型・Ｂ類型

表6－3　「総合的な学習の時間」において進路指導に関する内容を取り入れている盲学校（21校）における年間総授業時数



総授業時数	学校(数)	割合（%）
10時間以下	7	33.3
11～20時間	7	33.3
21～35時間	4	19.1
その他（「特に定めず」等）	3	14.3
計	21	100

表6－1　本科普通科（重複学級を除く）において「総合的な学習の時間」中進路指導に関する内容を取り入れている盲学校（21校）におけるその名称



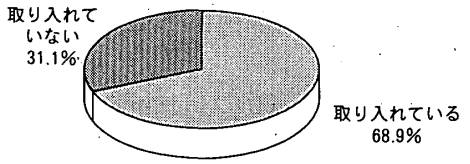
名称	学校(数)	割合（%）
「総合的な学習の時間」	16	76.2
その他の呼称	5	23.8

（注）「その他の呼称（５校）」の具体的名称：「フロンティア」，「かがやきタイム」，「きらめき」，「友光タイム」，「DCTタイム」

表6－4　「総合的な学習の時間」において進路指導に関する内容を取り入れている盲学校（21校）における主な学習内容

●将来の進路を決定していく上での材料を自分で集める。校内では調べる・話を聞く，校外では調査に出かけて発表する。
●進路について興味ある職種や理療科について調べる。職場体験の実施。
●卒業生の進路先（大学や職場）に行き，インタビューをする。
●進路先として興味・関心がある所の見学・体験。
●職業について知る，福祉、自分について知る。
●進路実現・自立に向けて（生涯学習に向けて，自己能力をのばす等）。
●各自が希望する進路について調べ，まとめて発表する。視覚障害者の多くが従事する三療について調べ，考える。生活訓練の必要性を考え，日本ライトハウス見学。卒業生（ヘルスキーパー）の話を聞く。
●実際に開業している治療院を訪問して，仕事内容とか苦労話などを聞き，質疑応答をして進路指導の一環とする。
●言葉づかいについて，電話での応対について，社会的マナー等。
●工場見学などを通して働くことの実際を知り，働くことの意義を考える。
●治療院見学，進路についての講演等。
●視覚障害者の就職・進学状況や，今の現状について調べ，まとめて資料を作り発表する。
●希望職種先での勤労体験学習，進路開拓，視覚障害者の職業調査・訪問。
●卒業後の生活設計。
●自信の進路とかめて，視覚障害者の進路先・就職先について調べる。
●視覚障害者の職業・大学・適性と進路。

表7　高等部本科普通科重複学級における教育課程中の職業関係教科取り入れの有無



取り入れの有無	学校(数)	割合（%）
取り入れている	31	68.9
取り入れていない	14	31.1
計	45	100

間」の中に「進路指導」に関する学習内容を「取り入れている」盲学校（21校）について，その状況を見ると，まず，「名称」については，多くの盲学校（16校・76.2%）が特につけてはいない。しかし5校（23.8%）が「フロンティア」「かがやきタイム」「きらめき」等の固有の呼称をつけて，生徒の学習に対する興味・関心を引き出し，高める工夫をしている（表6－1）。

履修対象の学年・類型については，6割以上の盲学校が「全学年」と答えているが，複数のメニューの中からの選択や，学年・類型を特定している盲学校もあり，生徒の実態に応じた導入の工夫がみられる（表6－2）。

また，年間総授業時数については，21校中2／3（14校）が20時間以下（内，6時間3校，12時間1校）と答えており，21～35時間としている盲学校は4校（うち，35時間3校）である（表6－3）。

さらに，主な学習内容については，表6－4に示す通り，①「自分を見つめる」「言葉遣いについて，電話での応対について，社会的マナー等」等の卒業後社会生活をおくる上での自己分析，②「将来の進路を決定していく上での材料を自分で集める」「各自が希望する進路について調べ，まとめて発表する」「卒業生の進路先（大学や職場）に行きインタビューをする」等の進路情報の入手，③「受験校情報」「視覚障害者の多くが従事する三療について調べ，考える」等の具体的な進学先・就職先へのアプローチ等，を視野に入れた幅広い進路関係の学習内容が取り入れられている。

2）高等部本科普通科重複学級における職業教育と進路指導の状況

（1）職業関係教科の教育課程上の位置づけ

全国における高等部本科普通科重複学級設置校（47校）中，回答校45校において，平成14年度教育課程の中に職業関係教科を「取り入れている」盲学校は31校（68.9%）である（表7）。

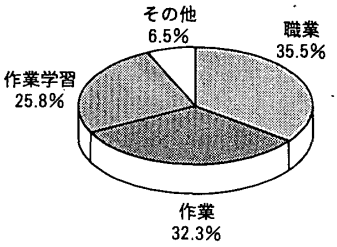
その31校の内容を見てみると，まず，教科の「名称」については，「職業」としているのは11校（35.5%であり，約6割の盲学校は「作業」「作業学習」等の名称を用いている（表8－1）。

履修学年・類型については，半数以上の盲学校が「全学年」としているが，対象学年の指定や「その他」の中には，例えば「3年重複B」と答えている盲学校があるなど，生徒の実態に応じた職業教育の実践が推測される（表8－2）。

また，年間総授業時数は，最少70時間（2単位）・最大385時間（11単位）であり，140時間（4単位）が8校と最も多い（表8－3）。一部ではあるが，「その他」の回答の中には，例えば「134時間～217時間」「120時間～300時間」というように幅をもたせての授業時数の設定を行っている盲学校もあり，生徒の実態の多様化が伺われる。

さらに，主な指導内容については，「農園芸」「陶芸」「工芸」「調理」「木工」「紙加工」「クリーニング」等の作業が中心であり，それらを通して，「見通しをもった行動や意欲・態度をはぐくむ」「身体能力の向上」「手指の巧緻性の向上」「援助依頼・挨拶・片づけ等の力をつける」等の教育が実践されている（表8－4）。

表８－１　高等部本科普通科重複学級において教育課程中職業関係教科を取り入れている盲学校（31校）における教科の名称



	学校(数)	割合（%）
職業	11	35.5
作業	10	32.2
作業学習	8	25.8
その他	2	6.5
計	31	100

表８－２　教育課程中職業関係教科を取り入れている盲学校（31校）における履修対象学年・類型

対象学年・類型	学校(数)	割合（%）
全学年	17	54.8
１学年	1	3.2
２学年	2	6.5
３学年	1	3.2
１・２学年	3	9.7
２・３学年	1	3.2
その他	5	16.2
無回答	1	3.2
計	31	100

表８－３　教育課程中職業関係教科を取り入れている盲学校（31校）における履修の年間総授業時数（総単位数）

総授業時数（総単位数）	学校（数）	割合（%）
７０（２）	5	16.2
１０５（３）	1	3.2
１４０（４）	8	25.8
１７５（５）	1	3.2
２１０（６）	2	6.5
２４５（７）	1	3.2
２８０（８）	2	6.5
３１５（９）	1	3.2
３８５（１１）	1	3.2
その他	7	22.5
無回答	2	6.5
計	31	100

表８－４　教育課程中職業関係教科を取り入れている盲学校（31校）における教科の主な指導内容

●農耕作業
●農業，窯業，さおり
●調理，農業，軽作業（缶つぶし）
●軽作業，農作業
●農業体験を通して観察や収穫の喜びを味わう
●農作物栽培や写真立て製作の実習と販売
●野菜栽培，木工，陶芸
●農耕，紙漉き，軽作業（作業所からの請負）
●紙漉き（はがき・しおり作り），農作物作り，木工（木片磨き），食品加工（クッキー作り）
●農園芸，木工，縫製，紙工
●農作業，木工，ホッチキス，空き缶つぶし
●紙工，木工，ビーズ製品作成
●１・２学年は窯業，３学年は紙加工（箱折り），布加工（ミシン）
●調理，クリーニング，内職的仕事（伴う搬入，納品，経理等），編み物
●木工，織物工
●陶芸，点字用紙再製，紙漉き，キャンドル・クラフト，染色，木工等
●陶芸
●箸入れ，箸磨き，封筒入れ，シール貼り等
●紙漉き作業，マット折り作業，クッション作業
●紙漉き，事務用封筒作り等の作業
●作業実習等で経験した能力を向上させる指導（ビーズ通し，調理，野菜作り，結束等）
●物作り（紙漉き・木工・ビーズ・貼り絵等さまざま）を通して作業に集中する，協力して仕事を進める，援助依頼・挨拶・片づけ等の力をつける，手指の巧緻性の向上
●自分のつけてきた力を使うことによって他の人の役に立つことができるということを知る
●作業学習
●作業
●作業所前指導，手指訓練等
●作業を通しての身体能力の向上
●作業を中心にカリキュラムを組む
●作業を通して見通しをもった行動や意欲・態度をはぐくむ
●知的障害養護学校の指導要領を参考にしている
●現在該当生徒なし

表９　高等部本科普通科重複学級（45校）における生徒の卒業後の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）

指導内容	学校(数)	割合（%）
社会性の育成	42	93.3
作業能力の向上	33	73.3
日常生活に必要な基本動作の確立	32	71.1
進路・職業問題に関する意識の高揚	26	57.8
情緒の安定	21	46.7
健康状態の維持・改善	19	42.2
各教科に関する学力の向上	14	31.1
その他	4	7.9

表10－１　全国盲学校小学部（60校）の児童に対する職業教育・進路指導の内容（複数回答）

職業教育・進路指導の内容	学校(数)	割合（%）
将来の進路についてのお話	35	58.3
中学部体験入学	23	28.3
「総合的な学習の時間」における学習	10	16.7
他校見学	9	15.0
その他	15	25.0

（２）生徒の卒業後の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容

全国盲学校の高等部本科普通科重複学級における，生徒の卒業後の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）について見てみると，回答のあった45校中，「社会性の育成」が42校（93.3%）と最も多く，次いで「作業能力の向上」(33校・73.3%)，「日常生活に必要な基本動作の確立」(32校・71.1%）の順であり，「各教科に関する学力の向上」は14校（31.1%）にとどまっている（表９)。

３）小学部・中学部における職業教育と進路指導の状況

（１）小学部

全国盲学校における小学部設置校（66校）中，回答のあった60校において，児童に対する職業教育・進路指導の内容（複数回答）を見てみると，「将来の進路についてのお話」が35校（58.3%）と最も多く，次いで「中学部体験入学」(23校・38.3%）となっており，さらに「その他」と回答している盲学校が15校（25.0%）である（表10－１)。「その他」の内容は，例えば「パソコン（インターネット）を使って情報を集める」「相手にわかりやすくまとめ発表する」「社会見学（職場見学)」「他校との交流」「重複学級（６学年）で生活単元学習の時間に知的障害者授産施設を訪問してパン作りを体験した」等（表10－２）であり，在籍児童の実態の多様化を反映していると見ることができる。

また，小学部児童に対して，将来の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）については，「日常生活に必要な基本動作の確立」が52校（86.7%）と最も多く，次いで「社会性の育成」(49校・81.7%）であり，「各教科に関する学力の向上」は38校（63.3%）にとどまっている（表11)。

（２）中学部

次に，全国盲学校における中学部設置校（66校）中，回答のあった60校において，生徒に対する職業教育・進路指導の内容（複数回答）を見てみると，「進路講話」が38校(63.3%）で最も多く，「高等部体験入学」(23校・38.3%)，「『総合的な学習の時間』における学習」(21校・35.0%)，「他校見学」(20校・33.3%)，「産業現場等における実習」(18校・30.0%）が３割台で続いている。さらに「その他」と回答している盲学校が16校(26.7%）ある（表12－１)。「その他」の内容は，例えば「２年生において『進路の手引』を利用して進路を考えさせる機会としている（学活)」「生徒に対するより保護者に対する指導を重視している」「校内集中作業学習を１週間行っている」等（表12－２）であり，小学部と同様，在籍生徒の実態の多様化を反映しているといえる。

また，中学部生徒に対して，進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）については，「社会性の育成」が（45校・75.0%）と「日常生活に必要な基本動作の確立」(43校・71.7%）とが７割台で最も多く，次いで「進路・職業問題に関する意識の高揚」(33校・55.0%)，「各教科に関する学力の向上」(31校・51.7%）が５割台で続いている（表13)。小学部同様，中学部においても，「社会性の育成」と「日常生活に必要な基本動作の確立」が，「各教科に関する学力の向上」に比して高い割合を占めている。

表10－2　表10－1の「その他」(15校) の内容

●授業の質的充実，学力保障。
●教科の中で関連性あることに。
●特別活動で，年齢にあわせて職業について考える。
●自立活動・学級活動を中心に進路意識の向上，社会生活力の育成を目標として指導した。中学部と一緒に体験学習も実施した。
●交流学習を通しての連携。
●交流学習等の実施により，一般生徒と進路に関しての話ができた。
●パソコン（インターネット）を使い，情報を集める。相手にわかりやすくまとめ発表する。
●社会見学（職場見学），他校との交流。
●生活・社会の時間に世の中の仕事について学習している。
●中学部について，教員や卒業生から話を聞く。
●1月の保護者参観日の時に保護者とともに中学部の授業を参観して回り，その後中学部の主任から中学部の学習・生活等について説明を受ける。
●重複学級（6年）で，生活単元の時間に知的障害者授産施設を訪問してパン作りを体験した。
●特に児童に対する指導は行っていない。
●特に徹底していない。
●児童・生徒に対して適応主義教育を行うことは問題あり。したがって，実施する予定もないし実施もしていない。

表12－2　表12－1の「その他」(16校) の内容

●学力保障，授業実践力の向上。
●進路指導は，自立活動・学級活動を中心に実施した。
●職業調べ，見学報告会、高等部理療科授業見学等。
●高等部理療科教員へのインタビュー（中3のみ）。
●2年生において，「進路の手引き」を利用し，進路を考えさせる機会としている（学活）。
●「道徳」で将来を考える題材を取り上げている。
●他校との交流。
●学級での個別指導（進路に関わって）。
●課題は個々に応じているため，取り組んでいる者は1名。
●校内での作業学習（週2～3時間）。
●校内集中作業学習を1週間行っている。
●重複学級生徒については，2年時1回・3年時2回の現場実習（施設）を実施している。
●保護者との話し合い。
●生徒に対するより，保護者に対する指導を重視している。例えば，保護者施設見学会、進路の話等。
●中学部生徒・保護者・職員を対象に，高等部授業参観，講話（保護者用説明）。
●今年度は2・3年が欠学年であり，また，重複生がいないので職業教育はない。

表11　全国盲学校小学部（60校）における児童の将来の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）

指導内容	学校（数）	割合（%）
日常生活に必要な基本動作の確立	52	86.7
社会性の育成	49	81.7
各教科に関する学力の向上	38	63.3
健康状態の維持・改善	27	45.0
情緒の安定	25	41.7
その他	8	13.3

表12－1　全国盲学校中学部（60校）の生徒に対する職業教育・進路指導の内容（複数回答）

職業教育・進路指導の内容	学校（数）	割合（%）
進路講話	38	63.3
高等部体験入学	23	38.3
「総合的な学習の時間」における学習	21	35.0
他校見学	20	33.3
産業現場等における実習	18	30.0
その他	16	26.7

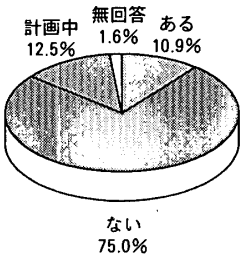
表13　全国盲学校中学部（60校）における生徒の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）

指導内容	学校（数）	割合（%）
社会性の育成	45	75.0
日常生活に必要な基本動作の確立	43	71.7
進路・職業問題に関する意識の高揚	33	55.0
各教科に関する学力の向上	31	51.7
作業能力の向上	21	35.0
健康状態の維持・改善	18	30.0
情緒の安定	17	28.3
その他	6	10.0

表14　全国盲学校における「個別の就業支援計画」実施の有無

有無	学校（数）	割合（%）
数年前より実施している	3	4.7
本年度より実施している	1	1.6
来年度よりの実施に向けて計画中	7	10.9
現在のところ実施についての検討はしていない	52	81.2
無回答	1	1.6
計	64	100

表15　視覚障害者に関する地域の「就業支援ネットワーク」組織の有無



有　無	学校（数）	割合（%）
ある	7	10.9
ない	48	75.0
計画中	8	12.5
無回答	1	1.6
計	64	100

表16　全国盲学校における按摩マッサージ指圧師の資格取得に困難が予想される本科普通科在学生徒の進路指導の基本的考え

基本的考え	学校（数）	割合（%）
全盲・弱視に関わらず保健理療科への進学を基本に考える	2	3.8
全盲・弱視に関わらず一般就労を視野に入れて考える	4	7.7
全盲の生徒については保健理療科への進学を基本に考え，弱視の生徒については一般就労を視野に入れて考える	2	3.8
視力の有無よりも生徒の特性を重視して考える	38	73.1
その他	5	9.6
無回答	1	1.9
計	52	100

4）視覚障害者に関する就業支援等の状況

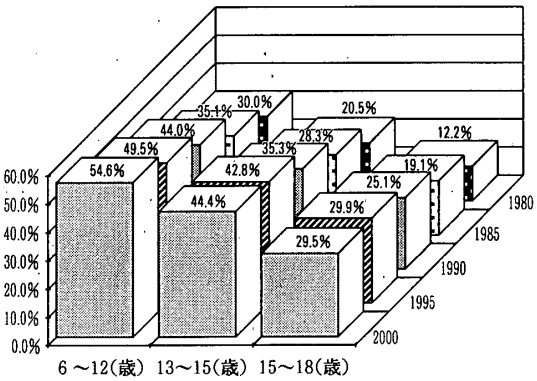
全国の盲学校（70校）中，回答を得た64校（質問項目によっては無回答校もある）において，視覚障害者に関する就業支援等の状況を見ると，以下の通りである。

まず，「個別の就業支援計画」実施の有無については，「実施している」盲学校は４校（6.3%）で，「来年度よりの実施に向けて計画中」を併せてもわずかに11校（17.2%）にとどまっており，ほとんどの盲学校において，現在のところ「個別の就業支援計画」は実施されていない（表14)。また，「実施している」盲学校（４校）における実施の対象学部・学科については，２校が回答しているが，いずれも「高等部本科」である。

次に，視覚障害者の就業支援について，地域の関係機関等との連携による「就業支援ネットワーク」等の組織の有無を見ると，「ある」盲学校は７校（10.9%）で，「計画中」（８校）を併せても15校（23.4%）にとどまっており，約３／４の盲学校において，上記ネットワークは組織されていない（表15)。なお，組織されている盲学校における「就業支援ネットワーク」の構成団体については，７校全てが，各種別の障害児学校，企業，教育行政関係機関等であるが，うち５校は，各種別の障害児学校の一つとして盲学校が参画しており，２校は，盲学校が中心の「視覚障害」単独の就業支援組織である。

一方，按摩マッサージ指圧師の資格取得に困難が予想される高等部本科普通科在学生徒の進路指導についてどのように考えているかを尋ねたところ，「視力の有無よりも生徒の

表17　全国盲学校における重複障害児童・生徒数（重複児童・生徒数の全児童・生徒数に対する割合）の推移



年度	6～12（歳）	13～15（歳）	15～18（歳）
1980	30.0%	20.5%	12.2%
1985	35.1%	28.3%	19.1%
1990	44.0%	35.3%	25.1%
1995	49.5%	42.8%	29.9%
2000	54.6%	44.4%	29.5%

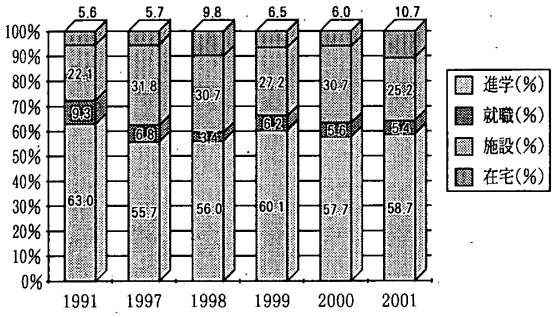
（注）香川邦夫　『重複障害教育の変遷』（日本ライトハウス21世紀研究会　『我が国の障害者福祉とヘレン・ケラー－自立と社会参加を目指した歩と展望－』　教育出版　2002）より作成

表18　全国盲学校における平成15年度重複障害学級数の全学級数に対する割合

学部	全学級(数)	普通学級(数)	重複学級(数)	割合（%）
小学部	312	177	135	43.3
中学部	223	134	89	39.9
本科普通科	232	147	85	36.6

（注）『平成15年度幼児・児童・生徒在籍状況』（全国盲学校長会『視覚障害教育の現状と課題－平成14年度年報－』［平成12年『盲教育の諸問題』より改題］42巻　平成15年6月）より作成

表19　全国盲学校高等部本科普通科卒業生の進路状況の推移



	総数(人)	進学(%)	就職(%)	施設(%)	在宅(%)	合　計
1991	354	63.0	9.3	22.1	5.6	100
1997	228	55.7	6.8	31.8	5.7	100
1998	209	56.0	3.4	30.7	9.8	100
1999	228	60.1	6.2	27.2	6.5	100
2000	215	57.7	5.6	30.7	6.0	100
2001	242	58.7	5.4	25.2	10.7	100

（注）『平成3年度卒業生進路実態』（全国盲学校長会　『盲教育の諸問題』No.32　平成5年3月）および『平成9年度～13年度卒業生進路実態』（同No.38・39巻・40巻・41巻・42巻　平成11年～15年6月）より作成。

特性を重視する」が回答校52校中38校（73.1%）と圧倒的に多い。他の回答は，きわめて少なく，「全盲・弱視に関わらず一般就労を視野に入れて考える」（4校），「全盲・弱視に関わらず保健理療科への進学を基本に考える」（2校），「全盲の生徒については保健理療科への進学を基本に考え，弱視の生徒については一般就労を視野に入れて考える」（2校）である（表16）。このことは，全盲・弱視に関わらず，理療以外の進路開拓がいかに困難であるかという現在の盲学校の状況を如実に反映しているといえる。

Ⅳ．考　察

1．第1次調査

第1次調査（「学校要覧」による調査）により，全国盲学校の高等部における学科設置の形態は，①本科普通科・本科保健理療科・専攻科理療科・専攻科保健理療科の4学科の設置，②本科普通科・専攻科理療科に加えて，本科保健理療科あるいは専攻科保健理療科の3学科の設置，の二つに大別される。

職業学科については，理学療法等の学科の設置もみられるもののそれらは極めて少数である。これは，やはり全国的に視覚障害者の伝統的職種である按摩・鍼・灸師養成のため

の理療・保健理療の学科が中心であることを示している。

一方，本科普通科においては，全体の８割以上の盲学校が重複障害学級を編成しており，その半数以上はさらにクラス別の編成を行っている。また，単一視覚障害学級においても，半数の盲学校がクラス別の編成を行っており，このことは，現在の盲学校における在学者の重度・重複化，多様化の状況を示すものといえる。

以下に，全国盲学校在籍児童・生徒の重度・重複化，多様化の状況を具体的に見ていく。

まず，表17は，1980年～2000年の全国盲学校における在籍児童・生徒数全体に占める重複障害児童・生徒数の割合を５年刻みに示したものである。高等部段階の年齢層（16歳～18歳）において，2000（平成12）年度と1995（平成７）年度との間に若干の減少（29.9%→29. 5%）が見られるもの，重複障害児童・生徒の比率は，全体として増加傾向を示している。

また，表18は，平成15年度の全国盲学校小・中・高等部における学級数の状況を示したものである。これにより，各学部における重複障害学級数の全体の学級数に占める割合を見ると，小学部43.3%，中学部39.9%，高等部本科普通科36.6%であり，重複障害学級数の比率は下学部にいくほど高くなっている。

さらに，表19は，全国盲学校の高等部本科普通科卒業生における進路状況の推移を示したものである。過去５年間（平成９年度～13年度）の状況を見ると，進学者数の割合は55%～60%の間を推移しており，施設入・通所者数は，平成13年度に若干の減少が見られるもののほぼ30%前後を推移している。また，この５年間の状況を1991（平成３）年度と比較して見ると，明らかに進学者数が減少し，施設入・通所者数が増加していることが分かる。

２．第２次調査

（１）高等部本科普通科（重複学級を除く）における職業教育と進路指導について

全国盲学校の高等部本科普通科（重複学級を除く）において，平成14年度教育課程の中に職業関係教科・科目を取り入れている所は約２割であり，残りの８割は取り入れていない。この実態は，やはり理療中心の職業教育・進路指導，および新職業教育実践の困難さという現在の盲学校教育の状況をそのまま反映しているといえる。

しかし，全国の高等部本科普通科の学級編成において，半数近くの盲学校がさらにクラス別の編成を行っていること（前記），少数ながら，例えば普通科の中に「生産コース」（大学・専攻科等の進学ではなく，就職・職業訓練校を目指すコース）等の独自のコースを編成して理療以外の職業教育を行っている盲学校があるという結果は，生徒の進路を伝統的職種である理療のみに限定するのではなく，個々の能力・適性に応じた職業教育・進路指導の実践として注目される。

次に，全国において，高等部本科普通科の平成14年度「総合的な学習の時間」の中に「進路指導」に関する学習内容を「取り入れている」盲学校は約４割であり，「来年度よりの導入に向けて計画中」を加えると約６割の盲学校が「導入」あるいは「導入」を計画している。

「進路指導」に関する学習内容を「取り入れている」盲学校においては，その「総合的な学習の時間」に固有の呼称をつけて，生徒の学習に対する興味・関心を引き出し，高め

る工夫をしている所がある。また，学習内容については，卒業後の社会生活をおくる上での自己分析，進学先・就職先を想定しての進路情報の入手等，幅広い進路関係の学習活動が実践されている。

（2）高等部本科普通科重複学級における職業教育と進路指導について

全国盲学校の高等部本科普通科重複学級において，平成14年度教育課程の中に職業関係教科を取り入れている所は約7割である。しかし，その内容を見ると，「取り入れている」盲学校においても，教科の名称を「職業」としているのはその約1／3であり，他は「作業」「作業学習」等の名称を用いている。また，履修学年・類型については，半数以上の盲学校が「全学年」としているが，対象学年の指定や，幅をもたせての年間総授業時数の設定等，生徒の実態に対応した教育課程編成の工夫も伺える。

さらに，主な指導内容としては，「農園芸」「陶芸」「工芸」「調理」「縫製」「クリーニング」等の作業を中心とする学習がほとんどであり，したがって，重複障害学級におけるこれらの学習内容は，理療以外の新職域を目指すというよりも，主として施設等への入・通所によるいわゆる福祉的就労を目的としての職業教育・進路指導が中心であることを示唆している。

次に，卒業後の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）としては，「社会性の育成」「作業能力の向上」「日常生活に必要な基本動作の確立」が上位を占め（いずれも7割以上の盲学校が回答），「各教科に関する学力の向上」と答えた盲学校は約3割にとどまっている。このことは，各盲学校において，生徒の卒業後の進路を見据えての指導として，日常生活・作業能力の向上や社会性の育成を，指導上の重要な柱として教育実践が行われていることを示している。

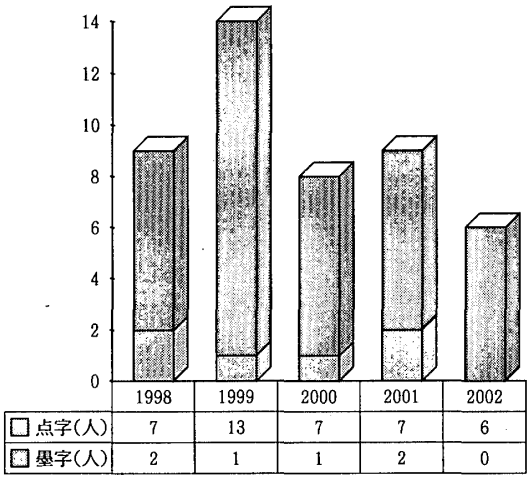
（3）小学部・中学部における職業教育と進路指導について

全国盲学校の小学部・中学部における職業教育・進路指導の内容（複数回答）としては，小学部においては，「将来の進路についてのお話」「中学部体験入学」が上位を占めており，中学部においても「進路講話」が最も多く，次いで「高等部体験入学」「『総合的な学習の時間』における学習」の順である。しかし，小学部・中学部ともに「その他」を回答している盲学校が全体の約3割近くも占めているという結果は，在籍児童・生徒の実態の多様化の反映とともに，個に応じたきめ細かな職業教育・進路指導の必要性を示唆するものである。

次に，小学部・中学部の児童・生徒に対して進路を見据えての充実が特に求められる指導内容（複数回答）については，小学部・中学部ともに，「社会性の育成」と「日常生活に必要な基本動作の確立」が，「各教科に関する学力の向上」等の他の調査項目に比して高い割合を占めている。このことは，「学力」の向上もさることながら，「ＡＤＬ」や「社会性」の獲得の重視とともに，在籍児童・生徒の実態の多様化（準ずる教育が可能な在籍児の減少，重複障害児の増加等）という現在の盲学校の状況を明確に示しているといえる。

表20　全国盲学校高等部本科普通科卒業生の過去５年間における就職者についての使用文字の比較

	点字(人)	墨字(人)	合計
1998	2	7	9
1999	1	13	14
2000	1	7	8
2001	2	7	9
2002	0	6	6
合計	6	40	46



（注）『高等部普通科平成10年度～14年度卒業生の進路』（全国盲学校普通教育連絡協議会　平成11年度・12年度・13年度・14年度・15年度総会資料）より作成

（４）視覚障害者に関する就業支援等について

全国において，平成14年度に「個別の就業支援計画」を実施している盲学校は，「来度よりの実施に向けて計画中」を併せてもわずか２割以下にとどまっており，ほとんどの盲学校において現在のところ実施されていない。また，視覚障害者の就業支援について，地域の関係機関等との連携による「就業支援ネットワーク」等の組織化についても，計画中」を併せても全体の１／４弱にとどまっている。

このように，「個別の就業支援計画」実施校および「就業支援ネットワーク」への参画・組織化が極端に少ないのは，二つの理由によるものと思われる。すなわち，その第１は，文部科学省協力者会議による「個別の就業支援計画」が提起されてまだ間もないために，実施に向けての検討が十分に行われていないと思われること，第２には，盲学校においては，明治以来現在に至るまで，一貫して理療師の養成を中軸とした職業教育・進路指導が実践されてきたことである。

一方，按摩マッサージ指圧師の資格取得に困難が予想される高等部本科普通科在学生徒の進路指導についてどのように考えているかを尋ねたところ，「視力の有無よりも生徒の特性を重視する」と回答した盲学校が圧倒的に多く，全体の７割を超えている。しかし，全国盲学校普通教育連絡協議会の調査によれば，過去５年間（平成10年度～14年度）における普通科卒業生の就職者（当然理療以外の一般就労）の数は，全国で46人であり，これを使用文字別にみると，墨字使用者が40人（87.0%）で，点字使用者はわずかに６人（13. 0%）である（表20）。

いずれにしても，理療以外の新職域に関する進路選択が迫られている現在の盲学校にあって，「一般就労を視野に入れて考える」とする回答が全体の10%にも満たないというこの度のアンケート調査の結果，および過去５年間の就職者（一般就労）の数がわずかに46人にすぎないこと等の実態は，全盲・弱視に関わらず，理療以外の進路開拓がいかに困難であるかという盲学校進路指導の現状を如実に反映しているといえる。しかし，障害の重度化・多様化，国家試験の難易度の増大等により，理療の資格取得が難しいと予想される在籍者は年々増加している。したがって，就業支援方策の構築等，これらの生徒に対する進路対策については，現在の全国盲学校の最重要課題の一つとして，その解決のための取り組みが急がれる。

V．まとめと今後の課題

1．まとめ

本研究は，全国盲学校における職業教育と進路指導問題に関する課題解決のための糸口を明らかにすることを目的として，主として高等部本科普通科および小・中学部の状況についてアンケート調査を実施し，その分析を行った。

結果の要点は，以下の通りである。

（1）高等部本科普通科（重複学級を除く）において，教育課程の中に職業関係教科・科目を取り入れている盲学校は約2割であり，この実態は，現在の盲学校における理療中心の職業教育・進路指導の現状を示している。しかし，独自のコースを編成して理療以外の職業教育を行っている盲学校が少数ながら存在すること等，個々の能力・適性に応じた職業教育と進路実現を目指した取り組みも実践されている。

（2）約7割の盲学校高等部本科普通科の重複学級において，職業関係教科を取り入れている。しかし，教科の名称を「作業学習」として教育を行っているところが多く，この実態は，知的障害養護学校の指導方法の導入が見られるとともに，いわゆる福祉的就労を目的とした職業教育・進路指導が中心であることを示している。

（3）小学部・中学部ともに，将来の進路を見据えての充実が特に求められる指導内容として，「各教科に関する学力の向上」等の調査項目に比して，「日常生活に必要な基本動作の確立」および「社会性の育成」が高い割合を占めている。このことは，小・中学部在籍者の重度・重複化，多様化の現状を反映しているとともに，いっそう個に応じた進路保障を目指しての教育の実践が求められていることを示唆している。

（4）「個別の就業支援計画」の実施および「就業支援ネットワーク」への参画・組織化が行われている盲学校は極めて少なく，この実態からも，伝統的職種である理療師の養成のみに依存してきた盲学校の職業教育・進路指導の現状を見ることができる。全国的に増加している理療の資格取得困難者に対する就業支援方策の構築等の対策が急務である。

2．今後の課題

本研究により，盲学校における職業教育・進路問題解決の手がかりを得るために明らかとなった今後の課題は，以下の通りである。

（1）文部科学省協力者会議の「今後の特別支援教育の在り方について」（最終報告，平成15年3月）をふまえ，障害の重度重複化，多様化が顕著となっている全国の盲学校に対し，在籍する重複障害児童・生徒の障害のより詳細な実態を明らかにするとともに，その進路問題への取り組みについて調査研究を行う。

（2）文部科学省の「21世紀の特殊教育の在り方について」（最終報告，平成13年1月）が提起している「個別の就業支援計画」および前記「今後の特別支援教育の在り方について」（最終報告）が提起している「個別の移行支援計画」について，本研究の調査結果を踏まえ，全国の盲学校を対象としてさらなる詳細な調査を行い，その分析に基づいて，盲学校固有の「移行（就業）支援計画」の基本モデルを作成する。

（3）上記「支援」のための「基本モデル」をもとに，現在のところほとんど取り組みが行われていない本県における視覚障害者の「移行（就業）支援」に関する組織的・系統的

実践を行う。

（4）現在盲学校が直面している職業教育と進路問題は，明治・大正・昭和の各時代に幾度も繰り返しその解決が迫られてきた経緯があることから，盲学校における上記の諸問題に関する課題解決の取り組みの歴史とその成果についても引き続き研究を行う[1)]。

＜註＞

1）これまでの研究成果としては，平田・久松（2003）戦前日本の盲学校教育における職業教育と進路保障に関する歴史的考察「長崎大学教育学部紀要－教育科学－」第65号（PP.29－44）を参照。

（付記）

本研究は，平成14年度科学研究費補助金奨励研究（課題番号14909023）の成果であり，日本特殊教育学会第41回大会（2003年9月　東北大学）において発表した共同研究「全国盲学校における職業教育と進路指導のあり方に関する調査研究（第1報）」（『日本特殊教育学会第41回大会発表論文集』342頁所収）と当日配布資料を修正・加筆してまとめたものである。第一次稿を久松が執筆し，平田が点検・修正・加筆したものである。